

令和8年度 第1回八戸産学官連携推進会議 議事録

日時 令和8年7月9日（木）10:00～

場所 八戸市庁本館3階 第一委員会室

【司会】(小笠原課長)

おはようございます。小林学長、少し遅れるということで、ご連絡いただきましたので、お時間になりましたので始めさせていただきたいと思います。ただいまから令和8年度第1回八戸産学官連携推進会議を開催いたします。

初めに本日お配りした会議資料を確認させていただきます。本日の会議資料は、次第、八戸産学官連携推進会議名簿、席図、資料1「産学官連携による八戸未来創造中長期計画 進行管理指標集計結果」、資料2「令和8年度八戸産学官連携事業」となっております。

皆様、過不足等はありませんでしょうか。それでは開会にあたり、会長の熊谷市長よりご挨拶いただきます。市長よろしく願いいたします。

【熊谷市長】

今年度第1回目の八戸産学官連携推進会議に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。短期間の間に地震が相次ぎまして、それぞれご苦労されていることと思います。地震、熊、地震、熊と続いておりますが、八戸市もその対応に追われておりますが、特に防災・減災につきましては、後ほど私の方からも御相談したいことがございますので、よろしくお願いいたします。これまでの取組について、そして今後の取組につきまして後ほど事務局から説明がございます。

これまで各種事業を通じまして、次世代の若者と地域を強固に結びつけ、地域課題の解決につなげる重要な役割をこの会議は果たしていると思っております。企業の人手不足、そして大学進学者数の減少など、地域経済や高等教育機関を取り巻く環境は大変厳しいものがございますが、こういう時だからこそ産学官が知恵を出し合っていくことが、これまで以上に必要だというふうに思っております。本日も皆様方からの忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げまして、私からの冒頭の挨拶といたします。

【司会】(小笠原課長)

ありがとうございました。それでは議事に入りますので、ここからの進行は熊谷市長にお願いいたします。

【熊谷市長】

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、案件1「令和7年度進行管理指標調査結果」について、事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】(番沢政策推進 GL)

おはようございます。八戸市政策推進課の番沢と申します。今日はよろしくお願いいたします。着座にて説明させていただきます。それでは、令和7年度の進行管理指標調査結果についてご説明いたします。資料1をご覧ください。この八戸産学官連携推進会議では、「産学官連携による八戸未来創造中長期計画」を定めておりまして、昨年度の改定を経て、今年度から「中長期計画2.0」をスタートさせております。この計画では、若者が地域の産業や文化を深く理解し、地域に定着することにより、多様な世代が継続的に生活できる、または生活したくなるまちづくりを将来ビジョンに掲げ、その将来ビジョン達成に向けて、4つの指針ごとに進行管理指標を定めて進捗管理を図っております。

それでは2ページをご覧ください。

各指標ごとに令和3年度からの推移をお示ししております。なお「中長期計画2.0」から新たに設けた指標につきましては、直近の数値のみを掲載しております。なお、本日は特徴的な項目のみを抜粋して御説明させていただきます。まず2ページの下の方のグラフ、1の②「地元企業就職率」についてでございますが、高校生の地元企業就職率は、令和3年以降は5割を切っている状況であり、令和7年度は約4割となっております。また、高等教育機関では、令和7年度は短期大学は8割を超えるなど、地元就職率は上昇している機関もございますが、依然として地元企業就職率は4割以下となっている状況が続いております。

続きまして4ページをご覧ください。

こちらは2の③「外国人留学生」についてでございますが、各高等教育機関とも外国人留学生の受入人数は増加してございます。令和7年度の全体合計では73人と、今後も増加傾向となることが予想されます。また、その下のグラフ「外国人受入企業数」を見ても、令和7年は300企業を超えるなど、こちらも今後増加していくことが想定されますので、外国人雇用、さらにはそれを支える共生についても、引き続き検討していく必要があるものと考えております。

最後に、7ページをご覧ください。

4の①「高等教育機関の入学者数及び学生数」についてでございますが、令和7年度は全体を通じて入学者数の増加が見られたところもありましたが、各校とも学生数は継続して減少傾向にあります。参考として、昨年10月時点の18歳以下青森県人口の推移の資料をこの後添付しております。参考のグラフになります。こちらのグレーの棒グラフが青森県の人口、オレンジ色が八戸市でございます。こちら一番左の0歳を見ていただきたいのですが、こちら1,000人を割っており994人となっております。今後18歳人口が減少していく中で、学生の確保は喫緊の課題でありますので、今後の産学官の取り組みの中でも、学生の確保に向けた取組を推進していく必要があるものと考えております。事務局からの説明は以上でございます。

【熊谷市長】

ただいまの説明につきまして、御質問や御意見ございますでしょうか。よろしいですか。では後ほど自由討議の中でもまた触れていただければと思います。

次に案件2「令和8年度産学官連携事業の取組状況」について、これも事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

同じく政策推進課の番沢から説明させていただきます。それでは、令和8年度産学官連携事業の取組状況についてご説明いたします。資料2をご覧ください。

当会議では、今年度、1ページに記載しております8つの連携事業を産学官連携推進会議の中で実施することとしております。

2ページをご覧ください。

1つ目の事業は、「八戸地域学」の開催でございます。本事業は、地域の歴史や文化、地域の産業等を学び、地域への理解や愛着の醸成を図ることで、若者の地元定着につなげていくことを目的に、各高等教育機関共通の講義として、令和4年度より実施しております。1コマ1講義、計15コマ分の講義をひと区切りといたしまして、今年度も3コマ分の講義を実施いたします。令和8年度の実施時期等については、検討部会を通じて現在検討し、今後決定していきませんが、地域学は今年度の3回の実施をもって予定していた全15回の講義がすべて完成いたしますので、令和9年度以降の継続や実施方法につきましては、今後検討部会で検討していく予定でございます。

続きまして3ページをご覧ください。

こちらは「長期実践型インターンシップ」でございます。本事業は、コーディネーターを配置した伴走支援を行う長期実践型のインターンシップを、市内企業で実施するものでございます。令和8年度は学生が参加しやすい夏休み期間を使いまして、約1ヶ月間、株式会社池田介護研究所、武輪水産株式会社、有限会社鈴木鉄工所の3社におきまして、職業体験や実習等のインターンシップを予定してございまして、参加学生については市内の大学、市出身者を中心に現在募集中でございます。コーディネーターによる伴走支援の実施によりまして、学生、企業にとって効果的な支援とし、地元企業の理解や関係人口の創出等につなげてまいりたいと考えております。

続きまして4ページをご覧ください。

こちらは「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」でございます。この事業は、若手社員のビジネススキル向上と職場定着を目的として実施するものでございます。令和8年度も前期2回、後期2回の計4回の開催を想定してございまして、現在委託事業者を公募中であるため、主なテーマ等については今後調整してまいりますが、社会人経験3年未満の社員を対象に10月から12月の間にかけまして1回目のセミナーを、年が明けまして1月から3月の間に2回目のセミナーを開催する予定としております。こちら実践的な内容とすることで、仕事での意識を高め、離職の防止と定着につなげてまいりたいと考えております。

続きまして5ページをご覧ください。

5ページでございますが、「高等教育機関・市内企業PR事業」でございます。この事業は、市内高等教育機関や市内企業の認知度の向上を図るため、主要なイベントへの出展や、商業施設等を活用し、市内の高等教育機関や企業の取り組みや魅力について、情報発信を行うものでございます。昨年度はイオン下田でのイベントを活用して実施いたしましたが、今年度はございませんので、この後説明をさせていただきます「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」におきまして、各機関から出展することを想定しております。効果的なPRとなるよう、今後内容等について検討してまいります。

続きまして6ページを御覧ください。

「外国人材受入セミナー」でございます。この事業は、人手不足の影響を受ける市内企業に対しまして、外国人材の雇用について考える機会とするため、外国人雇用を検討している企業を対象に雇用方法や制度説明等の外国人雇用の入口となるセミナーを開催するものでございます。今年度の実施時期やセミナー内容は現在調整中ではありますが、まず10月頃を目処に講師や講演内容の方向性を決定いたしまして、年内12月までの間に開催をしたいと考えております。市内企業のニーズに即した内容となるよう、講演の内容や構成を検討した上で実施してまいりたいと考えております。

続きまして7ページをご覧ください。

先ほども少し触れましたが、「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」でございます。高校生や大学生等を対象に、市内企業の製品や技術、仕事体験の機会を提供することで、市内企業の認知度の向上と将来的な人材確保につなげることを目的として実施するものでございます。令和8年度は仕事体験などができるブースに加えまして、若手のトークセッション、あと保護者を対象とした就職セミナーを実施する予定としております。実施時期につきましては、保護者に向けたセミナーを11月29日の日曜日にプラザホテルで、フェアを12月1日火曜日にプラザアーバンホールで開催する予定としております。より多くの参加学生を募るため、今年度は参加する高校に貸し切りバスを手配する予定としておりまして、引き続き参加企業の募集と合わせまして、学生や保護者へのフェアの周知等に努めてまいりたいと考えております。

8ページをご覧ください。

こちらは、この資料にも赤く新規と記載しておりますが、令和8年度の新規事業でございますが、「産学官連携Uターン事業」でございます。本事業は、UIJターンの促進や地元愛着の醸成を目的に、八戸地域へのUターンを検討中の市内高等教育機関出身の首都圏に在住する方々に対して、企業の紹介や移住相談を実施し、即戦力となる人材の地元回帰を推進するものでございます。第1回目になる今年度は、10月24日に東京都内におきまして、市内高等教育機関出身者の20代後半から40代の光星学院グループの卒業生をメインターゲットに、市内企業紹介のブースや移住に関する個別相談等を行うUIJターン促進イベントを同時に実施することで、移住・Uターンにかかるワンストップイベントとなるように現在進めております。こちらは同窓会のネットワークを活用し、関係する即戦力世代へのアプローチを実施いたしまして、地元への回帰、還流を促進してまいります。

9ページをご覧ください。

こちら令和8年度の新規の事業でございますが、「インターンシップ受入企業支援事業」でございます。本事業は、市内企業の採用力を根本から強化することを目的といたしまして、インターンシッププログラムの作成支援を実施することで、大学生等のインターンシップ参加を促すとともに、市内企業における新卒者の確保や早期離職の防止を図るものでございます。令和8年度は第1回目になるんですけれども、インターンシップをまだ実施したことがない企業や、その強化を検討している企業を対象としたセミナーと、伴走支援を組み合わせることを考えておりまして、インターンシップ受入体制の構築を支援することとしております。7月から9月にかけて、市内企業を対象としたインターンシップに関するセミナーの開催と合わせて伴走支援を実施することとしております。このセミナー開催と個別支援の組み合わせによりまして、企業の最適なインターン受入体制の構築を支援してまいりたいと考えております。

10ページは、これまでご説明させていただきました今年度の事業をまとめたものでございます。目

的、ターゲット、あと八戸市のほうの事業担当課も参考として載せておりまして、ひと目で分かる資料となっておりますので、ご参考としていただければと思います。事務局からの説明は以上でございます。

【熊谷市長】

ただいまの説明に対しまして、御質問、御意見等ございますでしょうか。はい。

【武輪会頭】

プロジェクトの3番目「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」は、参加者はどういう形で募集されているか教えていただけますでしょうか。

【事務局】中嶋産業労政課長

産業労政課でございます。

御質問いただきました若手社員基礎力向上・職場定着セミナーの参加者ですけれども、主に入社して3年未満の新入社員の方を募集してございまして、新聞による広告ですとか、あとは会社へのダイレクトメール、そういったものも使いながら募集をしているところでございます。以上でございます。

【武輪会頭】

はい、ありがとうございます。

【熊谷市長】

他にございませんでしょうか。はい、どうぞ。

【土屋校長】

非常にたくさんのメニューがあるんですけど、プロジェクトの2の「長期実践型インターンシップ」というのがありますが、これ昨年は市外の大学が7名参加ということですが、今年度これが市内というか、この4つの高等教育機関というのをターゲットにする計画があるのかどうかということと、この学生への周知っていうのはどういうふうにされているのか教えていただければと思います。

【事務局】(見付若者活躍課長)

若者活躍応援課の見付でございます。

昨年はですね、市外の大学生7名の参加ということだったんですが、今年度は市内の大学生も参加していただけるように、各学校のほうにはですね、お願いをして、個別に営業させていただいておりました。特に職員が各大学のほうに回ってお願いしているのと、あとはインターンの受託先であるパリュースフトの担当者が、各大学に個別に回ったりしながら、学生の募集を行っております。去年も市内大学生もと思っていたんですが、課題としては1ヶ月間というところになると、バイト

だったりとかですね、まあそういう状況もありまして、なかなか集まりづらいというところがありました。この長期インターンシップは企業の課題を解決につなげるために、学生と一緒にプロジェクトを実行していくというところが目的というところにもなりますので、そういう意味では意欲のある学生というところがどうしても参加してくるというところもあります。その募集にあたってはバリューシフトのほうでプロジェクトインデックスっていう、全国的に長期のインターンシップを募集するようなサイトがありまして、そこに今回受け入れる企業の池田介護研究所、武輪水産株式会社、鈴木鉄工所さん、それぞれの企業の課題をプロジェクト化して、このプロジェクトと一緒に解決しませんかという、プロジェクトインデックスを立ち上げまして、今、学生を募集しているという状況でございます。

【土屋校長】

これはインターンシップと言っても、その会社に行くというようなものではなくて、何か在宅であるとか、違うところでもやるっていうことも含めて、1ヶ月っていうような内容なんですか。

【事務局】(見付若者活躍課長)

こちらはですね、基本的には八戸市に来ていただいて、学生共同の生活をしていただく。平日は企業に行って、企業担当者とそれぞれ課題解決に向けたプログラムを実行していく。土日は基本休みということになるので、地元を知ってもらうためにいろいろ回ったり、そういう体験をしてもらうメニューとなっています。

【土屋校長】

つまり7名は合宿みたいにして一箇所にて、平日は各会社にそれぞれ分かれて行って、土日はこの周辺をよく理解してもらおうと。だからプログラムとしては必ずしも市内で教育を受けている必要はなくて、関心を持ってくれる若者がいればそれでもオッケーだという意図もある。

【事務局】(見付若者活躍課長)

企業側にとっては別に市内の学生じゃなくてもいいっていうのはあるんですが、我々としては市内の学生を重点的に今集めております。

【土屋校長】

はい、了解しました。

【事務局】(見付若者活躍課長)

ぜひ各大学でもご参加していただけるように呼びかけていただければありがたいです。よろしくお願いいたします。

【熊谷市長】

はい、他にございませんでしょうか。はい、どうぞ。

【船崎学長】

7 ページ目と5 ページ目にある、この「八戸企業魅力発信・発見フェア」です。

これ高等教育・市内企業PR事業の枠組みの中で組まれているのかなという理解なんです、5 ページ目では昨年度やっていただいたような、高等教育機関の出展という形が明確にありました。今年度はそれに相当するものは明確にはないということなんですか。もしくはこのフェアの中で一部を使って、何かブースを構えるようなこともあるのか、ちょっとそこが見えないんですが。

【事務局】(小笠原政策推進課長)

政策推進課でございます。昨年度は高等教育機関のPR、イオンモール下田で行いましたけども、昨年度はイオンモール下田 30 周年記念の事業ということで、こちらのブースを無料で貸し出しただけだったところで、2 ヶ月というロングスパンでPRということができたんですが、今回その部分がないものですから、予算も限られた中で行わなければならないということで、企業魅力発信・発見フェアのところと抱き合わせでできないかなというところを今検討してるところでございます。詳細につきましては、まだこれから調整という段階でございます。以上でございます。

【船崎学長】

はい、ありがとうございます。あともう一点よろしいでしょうか。先ほどちょっと土屋先生から御質問があった長期インターンシップなんです、ちょっと私も詳しい内容理解できてないんですが、学生に対しての支払いってというのは発生するのか。何か給与にはならないかもしれませんが、何かお手当みたいなものは、その受け入れられる企業のほうで準備されるのか、交通費みたいなものはどうされるのかとか、そこらへんの細かい制度設計なのかもしれないんですが。そこは予算で計上されているのか、受け入れ企業のほうで考えていただく格好になっているのか、教えていただきたい。

【事務局】(見付若者活躍応援課長)

学生の参加に伴う経費についてですが、こちらにつきましては各企業からお一人3 万円を出していただいております。その3 万円を、この1 ヶ月間の活動経費として学生にお渡しをしております。

我々事務局の方で委託しているものは、学生の交通費、あとは滞在期間中の伴走支援に関わるコーディネーターの費用などを委託料の中に含めております。宿泊費につきましては、国の交付金を活用しているということもありまして、そこは対象外というところもありましたので、受託者の方の努力でやっていただいているというところでございます。

【船崎学長】

ありがとうございます。

まあ、色々な企業がインターンシップを大々的にやっていて、本当に丸抱えでやっているような状況で、昔のバブルの時の就職活動のように、インターンシップで儲かって帰ってくるという学生も耳にします、なかなか厳しいかなということも考えました。それだけ意気込みがあるというのか、受入企業様の方で魅力的なプログラムを御準備いただかないと、意欲的な学生を集めるという

ことも難しいのかと感じてしまうところもあります。

ぜひ市の方の伴走支援があるということですので、しっかりサポートいただければなというふうに感じました。以上です。

【熊谷市長】

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。はい、どうぞ。

【小林学長】

予算の委託料について。これ、3つの事業、3つの事業で金額はそれぞれいくらずつですか。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

こちらの1つ目の「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」はこちらが1,000万円です。

続きまして「八戸若者力形成インターンシップ事業」はこちらが、約700万円です。

続きまして「産学官連携Uターン事業」はこちらが300万円になっております。合計が2,000万円になります。

【小林学長】

委託先は、企画提案か何かをやって選んでいるという感じですか。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

はい、企画競争と言いますか、公募で行っております。

【小林学長】

それぞれの事業はどこに決まっていますか。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

はい、全て決まっております。

【小林学長】

それぞれの事業はどこですか？

【事務局】(見付若者活躍応援課長)

委託先につきましては、「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」はデーリー東北さん。「八戸若者力形成インターンシップ事業」はバリューシフトさん。「産学官連携Uターン事業」はあおもり創生パートナーズさん。それぞれプロポーザル方式での決定となっております。

【小林学長】

収入は市負担金ってことですが、これは特別会計じゃなくて、これで一つの会計にしているって

いうだけの意味ですよ。実際は市から直接出るっていう。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

はい、別の財布と言いますか。会計を別に行っているということです。

【小林学長】

地方創生交付金というのは、決まってる分はあるんですか。去年は地方創生交付金だったと思うんですが。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

はい。今年度は8つの事業になりますけれども、この1の「八戸地域学」以外が、国の「地域未来交付金」の対象となっています。

【小林学長】

地域未来交付金の金額はいくらですか、今年の分。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

収入の2,300万円のうちの半分、2分の1となります。国庫が半分で、残りが市費となります。

【小林学長】

それは既にもらうのは決まってるんですか。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

決定しております。

【土屋校長】

関連してですが、この「八戸若者力形成インターンシップ」というのは、このプロジェクトの何番になりますか。

【事務局】(番沢政策推進課 GL)

プロジェクト2番の「長期インターンシップ」と3番の「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」の両方になります。

【熊谷市長】

他にございませんか。それでは意見交換に入っていきますので、またその中で御自由に発言いただければと思います。今年度の取組は先ほど事務局から説明があった通りですが、今後、産学官で取り組んだほうが良い事業や今後の産学官のあり方など、忌憚のない御意見をいただければと思います。発言の順番は土屋校長から反時計回りをお願いいたします。それでは土屋校長お願いいたします。

ます。

【土屋校長】

はい。私が用意して考えてきたのはあるんですが、その前に今のインターンシップのところで、^(株)池田介護研究所さん。この会社さん、実はアマゾンウェブサービスというところのスタートアップとかアントレプレナーのプロジェクトにも手を挙げていらっしゃいます。高専の学生に 75 万か 100 万くらいのお金を出して、介護支援をするための支援プログラムを開発させて、かなりレベルの高いものができて、もしかしたらアマゾンが支援して、何かスタートアップになるのかなっていうようなところまで行っています。非常にその意識の高い若者と一緒にやろうという会社さんがやっぱり出てきて手を挙げるんだなというのが、今日の資料から見えてきています。すごいやる気満々の会社なので、それに若者がこう結びついてというのは良い取組かなと思いました。ぜひ色々支援できればなと思います。

あと、私は前の会でも申し上げましたけれども、ふるさと納税で高等教育機関の支援の制度設計を是非八戸市さんの方でご検討いただければなと思います。前にもお話ししましたが、佐世保とそれから長岡では、これでかなりの支援をいただいています。高等教育として受けて、それを高専とか大学に配分して、それは 1,000 万単位だということですので、八戸はふるさと納税がマイナスだということをお聞きして、ちょっとびっくりしてるんですけど、この制度設計について御検討いただければなというふうに思っています。それが 1 点です。

もう 1 つ、冒頭に市長の方からお話がありました防災・減災のお話でございます。今、地震も多発しておりますので、非常に意識も高くなってるのかなというふうに思います。高専としては、この防災・減災の避難拠点として高専を市民に開いていくために、田面木と白山台の地区町内会連合会との打合せ、連携というのも今進んでいます。学院大さんの方では「防災士」のトレーニングコースというのを学院大さん持っていて、うちの教職員も受講して防災士の資格を得ていて、そういう意味ではそういうトレーニングコースが学院大の方であるというのは非常にありがたいなと。そこにうちの教職員なり学生が受講するというシステム、地域連携をして。うちとしては、エネルギー自立型の避難施設っていうのを今作りたいというので、補助金とか色々画策をしているところでございます。教育センターを作ったのもその一環で、実験施設としての ZEB とか ZEH とかをキャンパス内に作って、夏涼しい、冬温かい避難所が作れて、ソフトパワーを学院大さんと一緒に作っていければいいなと。ハード的なのは我々建築があるのでそこでやって、ソフト的なのは学院大さんと協力して、地域連携してと。そこで実は残っているのがですね、本校と八戸市さんとの防災協定が今まだ残っておりますので、ぜひそれを前に進めていただければなと。そうすると行政と官と地域住民・地区町内会と連携が取れて、ハードパワーとソフトパワーが合体するというような一応シナリオは書けるかなと思っているので、御検討いただければなと思います。私からは以上です。

【熊谷市長】

ありがとうございます。続きまして、船崎学長お願いいたします。

【船崎学長】

私の方からは、外国人材受入れに関することです。本学では外国人の大半がミャンマーか

ら、あとは中国から留学生が何人かいるというところですが、直接ミャンマーから今受け入れているというところもありまして、少し日本の文化にまだ十分慣れていないとか、風習に慣れていないというところもあって、多少手を焼いているところもあります。何か市の教育プログラムみたいなものを活用して、そういう学生達に対してこの八戸をよく知っていただくという取組は大学でももちろんできるんですが、市を挙げて何か八戸を知ってもらう、日本の文化を知っていただく、それから日本人のゴミの出し方とか、そういう日本で活躍していただくためには、日本人としての当たり前がなかなかすぐには御理解いただけないところもあるので、市と一緒にそういう外国人の受け入れをさらに進めるに当たって、起こり得るそういう問題を事前に解消できるような体制を取れないかなと考えています。中国人の方であったり、国内にある日本語学校であれば、そこでかなり慣れてきていただけるので、あまり苦労はないんですけども。直接来る場合には、その部分がちょっと大学として、マンパワー的に足りないところもありますので、非常に必要な取組かなというふうに感じております。是非何か一緒に考えていく機会があればなと思っております。

あとそれから、先ほちょっと質問させていただいた「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」の中で、やはり地元にある大学を知っていただきたいというのは非常に強く感じてるところもあります。それは自助努力でしようというふうなところもありますが、やはり今地元の大学に来ていただければ、まだ十分な数ではないかもしれませんが、地元就職するという、いわゆる人財のダムにはなっているというところで。なかなか地元の大学を低く見る傾向にあるのかなと。若い人とか親の感覚でもまず外に出る、外の方が素晴らしくて内は、というふうな、いわゆる「青い鳥現象」みたいなことが起こっているのかなというところで。保護者の方には特に地元の大学の理解を促したいというところがありますので。オープンキャンパスで来ていただく方は、大学進学意欲が高い方たちなのでそういう方々には届くんですが、その前の方々になかなか大学としては届きにくいところもあるなというところもありますので、引き続き、市と高等教育機が力を合わせて保護者向けの説明であったり、保護者に伝えていく何かの機会をいただければなというふうに思っております。大学に来ていただければ、かなりの確率で外への流出を防げているというのは間違いないのかなというふうに思っておりますので、その重要性を改めて御認識いただきたいというところを申し上げて、私からの発言は以上です。

【熊谷市長】

ありがとうございます。1点目の外国人材の受け入れに関しまして、今「多文化共生推進プラン」を作って、今年度は取り組みを強化することにしておりますので、高森次長の方から少し説明を。

【事務局】(高森次長)

多文化共生に関して今御提案いただきました、外国人の方に日本文化、八戸の文化を知っていただくということでは、市では国際交流協会と連携をしまして「しゃべるべ」という、日本人と外国人住民が一緒にアクティビティを通して体験交流を深めるプログラムなどやっております。今年度も種差海岸のトレッキングですとか、料理を一緒に作ろうとか、過去には流鏑馬体験とか、八戸や近隣の市町村と一緒に行って、文化に触れてもらうということもやっております。あとはそのゴミの出し方等につきましても、今後は「生活オリエンテーション」のような取組も充実させたいと思っ

ております。一方で、市での取組もあるんですけれども、今年度、八戸学院大学のゼミの皆さんが、市の助成金を活用して、多言語表示ですね。市内まだまだ多言語表示も少ないので、インバウンドのお客さん向けとか、あるいは外国人住民向けのゴミ出しの表示とかを、その地域の住民に合わせた多言語で表示を作成して、掲示していくプロジェクトを応募いただいていたので、市の取組や、学生の取組、あるいは市民団体の取組と連携しながら様々進めていきたいと思っております。

【熊谷市長】

ありがとうございます。保護者向けセミナーって去年もありましたか。

【事務局】(見付若者活躍課長)

はい。去年はフェアの中の一環として、ある時間帯でそういうセミナーを開催したんですが、やはり参加者がまちまちで、その時間帯にいないと聞けないというところもあったので。今年度は保護者向けセミナーを別日で開催して実施したいと思っていました。対象は主に高校生の保護者というところになってくるかなとは思いますが、来年度以降は、そこを中学生のところまで広げていきたいと思っていました。やはり保護者が地元のことを知らない、自分の子供にも進路とか進学にあたって話ができないという状況が、色々なアンケートからも見えてきておりましたので、やはり子供の進路に保護者も関わるというところを、保護者の皆さんにも気づいていただきたいとか、分かっていたきたいとか、そういうセミナーにしていきたいと思っております。

【熊谷市長】

ありがとうございます。よろしいですか。はい。続きまして、柏葉教授お願いいたします。

【柏葉教授】

本日、ちょっと学長が所用により代理で柏葉が出席させていただきました。

やはり本学も特に「介護福祉」はネガティブなイメージがどうしても地域にあり、学生数がなかなか集まらないというところで、色々な努力をしながら介護のイメージアップを図らせていただいているところです。八戸市さんにも多大なる御協力等をいただき、ありがとうございます。

留学生に関しましても、今まで青森県そのものが特定技能でたくさんの人たちは来るんだけど、定着せず結局帰ってってしまうということで、なかなか留学生というところに目を向けていただけなかったんですけれども、ここ最近、施設の方も長く働いてくれる人たちが欲しいということで、留学生を欲しいという施設が少しずつ増えてきております。今年度は4名の新入生だったんですが、次年度からは8名から9名。実はもっと希望はあったんですが、日本語を教育してくれるところが、うちは仙台育英さんが主なんですけれども、もう8名が限度だということで。あとは日本語をどこかで勉強してる子たちを受け入れなければいけないというところがあってですね、そうすると八戸は日本語学校がないというのがあり、なかなかその需要と供給のところ、嬉しい悲鳴ではあるんですけれども、うちでも欲しいんだけど、日本語をちゃんと勉強するところがないために、受け入れることが限られているという問題が一つ発生しております。

あとは八戸市の市営住宅の方を提供していただき、本当にありがとうございます。やっぱり住む

ところの問題というのも大きいというのが一つありまして、引き続き継続してお願いしていければなということがあります。それから今国際交流で、色々なイベントをしていただいているんですが、一つ問題は「あし」。あしがないというか、そのイベントには参加したいんだけど、行けないということで。うまくバスを使って行ければいいんだけど、そこのアクセスがうまくいかなかったりとかということで、結構教員たちが送り迎えをしたり、教員たちの負担が多くなっていたりとかして。本学に来る学生たちはほとんどお金がない子たちなので、奨学金の中でやりくりしていると自転車一つ買えない。何かどこか市で自転車をレンタルで貸してくれるといいよねとかみたいなことがあったり、まあそういった細々とした生活の部分での困りごともあったりしているところなんです。私からは以上です。

【熊谷市長】

ありがとうございます。受け止めさせていただきます。それでは、次、小林学長お願いいたします。

【小林学長】

外国人材は、うちも今お話ししたような留学生もあるんですが、八戸に日本語の教育機関という留学生に対する、あると非常に助かるっていうのは同じようなところであります。

それからですね、ふるさと納税の話が出てたんですけれども。八戸は負けてるというか、大体あのふるさと納税は反対だったんですよ、前からそもそも。なんで反対かという、よそから取ってくるわけですよ。勝ち負けが実際自治体同士で。要するに国がその分出すんだったらいいけど、競争させてるだけなんだよね、ふるさと納税っていうのは。ひどい制度なんだけど、それが今さらに悪い、プラットフォーム会社が中抜きしてるわけですよ。ひどい制度ではあるけど、まあしょうがない。あるものはしょうがない、ある以上は勝って欲しいって感じはあるんですけど。

「企業版ふるさと納税」ってありますよね。これは返礼品がない。返礼品がなくて純粋に寄付したいところに寄付すると。で、法律じゃないので来年度で終わり、確か。ただ要望が多いいんでもしかすると継続されるかもしれない。これは100万円寄付すると、90万円が税金控除されるんですよ。ですから10万円さえ用意すれば、100万円寄付できるという仕組みなんで、これうまく活用したらどうかなというのがあります。ただ、本社がある自治体には寄付できないということになっている。八戸って東京の本社とか、八戸以外の本社も結構あるので、その高等教育だったり、教育のため、いずれは御社の東京出張所の人材にも繋がる可能性もあるなど、色々しながら働きかけるっていう手はあるかなと。あと連携中枢都市圏で高等教育機関と包括連携か何かやりながら、まちづくりへの協力だったり、学生との色んな連携事業だったり想定しながら、八戸の会社で五戸と繋がりがあるところは五戸町に寄付して、それを全体として集めるとかですね。許されるかどうかあれだけど、知恵を使えばやれるんじゃないかと。9割が控除されるので、実際に企業が寄付してるのがあるじゃないですか、新聞にこう写真出てこうやって「100万円寄付しました」と。おそらくあれ企業版ふるさと納税で、100万円は寄付してるけど実際は10万円負担という感じではないかと思うんですよ。まあそういう感じがあります。

それからですね、防災士のお話あったんですけど、先般うちの地域連携研究センターで防災士養

成講座やっています。ただ、これは国の資格ではなくて、防災士機構が与える資格ではあるんですけども、実際に防災に関わる必要な知識だったり、実際の技能・技術っていうかそういうのも集中して学んだ上でなければ試験が受けられないということになっているんで。いわゆる防災の専門家っていう、消防士だったり、実際に災害が起こった時に活躍が期待されるような職種の人ではない一般の市民・住民がですね、必要な知識・技能を得るということは、一旦災害が起こった時に大きな役割を果たすと思うんですよね。ですから、うちは8年前からコツコツとやり始めてきて、今かなり受ける人も増えてきてですね。むつ市とも防災士の養成にかかる連携、むつ市から結構、多分市役所が旗振ってるのではないかなと思うんですけど、受けに来るんですよ。遠いんであっちで開いてくれないかって話があってそういうこともやったんですけども。今地震もちょっと続いているようなところもあるんで、一般の皆様がその資格を取るっていうのは非常に重要なことではないかと。会社の中でも何人かはそういうことを学んだ上で、実際の災害予防のためだったり、実際に発生した場合の対応っていうのは非常に力になると思うんで、うちはそういう機能を持っているということだけ、ずっとやってきてるってことだけ申し上げさせていただきます。

それと、フェアで地域大学を知ることについての効果とかについて、大学生き残りの時代に入ってきて、自助努力という言葉もさききありましたけど、あくまでも民間の経営の中でやっているんですけど。私立大学は自分たちで頑張るというのが基本中の基本ではあるのですが、私立大学の歴史をみると、最初は人口が急増してくるわけですよ。どういうことかという、国立や公立で受け入れることができない、要するに進学率の上昇に合わせて、どんどん大学を作れという形で、ある意味で私立大学が増えていった経緯があって。その中で、確かに私立大学ではあるけれども、高等教育という分野っていうのは公的な役割というものもあると思うんですよね。知識を与え、若い世代を育てていくという意味では。しかし実際の状況を見ていくと、私立なんだから国の助成金の割合というのは5割を超えてはいけない、5割以下でなければならないというルールで線を引かれていたんですけども、段々と大学数が600校を超えて増えるに従い、その比率はどんどん下がってきているんですよ。去年の割合は8.9%まで落ちているという。国からの補助率がそこまで下がってきており、厳しい状況になってきていると。

先般、財務省の財政制度等審議会の中でも議論がありましたが、2040年には大学数を250校減らすという数値目標出すんですよ。これは4割近い大学をなくすということで、その多くは地方の大学であると考えられるとですね、もうあからさまにダウンサイジングしろという言葉が使われています。地方にとって、高等教育機関が地域からなくなるというのは、八戸市にとっても大きなマイナス要素になると思うんですよね、だからそういう視点で議論をしていく必要があるんじゃないかと思っていますよね。八戸工業大学や八戸学院大学、短期大学部合わせて2,000人ぐらいの若者がこの地域にいるわけですが、その層がいなくなることもありますし、それから学識を持った先生方がおられ、まちづくりに対してもアドバイスをいただける、地域の頭脳集団としての役割もありますし、ここに住んで、いろんな街のことに意見を言う方がおられるっていうことも大きいと思うんですよね。何かそういったことについて、やはり高等教育機関が必要だっていうことを訴えるような形での、皆さん集まった中で、それを国にも訴えていくようなですね、そういう形を作っていく必要があるんじゃないかなという風にはちょっと思うんですよ。今すぐじゃないだろうと言われればそうだけど、必ずやってくる未来なんで、そこをちょっと何か、何かしらの形を作っていく

必要があるんじゃないかっていう風に思っています。今国で議論が始まったのが、23 区内の大学について、時限立法で入学者の凍結が続いてるんですね。特段の何かがなければ入学者を増やしてはいけないということがですね、来年度で切れるんですよ。そうすると、中央の大学はどんどん増やす可能性があるんですね、取り合いですから。そうするとその影響がもうすぐ出てくる可能性があるわけですね。そういったことについて、何かしら我々としての対抗策というか、地域の問題としてこう取り上げてもいいんじゃないかと。先ほど「自助努力」とおっしゃったけども、自助努力だけで、なかなかこれ乗り切れないんじゃないかという感じがちょっとしています。頑張れば乗り切れる気はするんですけどね、頑張らないといけなくなっている感じがちょっします。あまりにもちょっと漠然とした話で申し訳ないです。以上です。

【熊谷市長】

企業版ふるさと納税頑張ります。

【小林市長】

国は推奨しているんです。ネットを探すとパンフレットなんかも出てくるんで。ただ本社があると出せないんで。多分やれるんじゃないかと。

【熊谷市長】

それから私立学校が時代の要請に応じて発生してきた歴史っていうのは、私も分かっておりまして、公共の教育の一翼を担ってきている。地方にとっても非常に重要だという認識を私は持っておりますので、それを地方としてどう考えて、国に対して訴えていくかという今の御発言は全くもったもだと思います。すぐじゃないとは仰りますけれども、でもそろそろ動くのであれば動かなければいけないような気がいたします。

【小林学長】

今、文科省が何をやっているかっていうと、評価基準の詳細化なんですよ。非常に細かい評価基準を作って、それで星をつけると。三つ星、二つ星、一つ星、星なし。何やるかって言ったら、要するに私学助成みたいな財政措置での差をつけていくんだと思うんですね。ですから、だんだんそういうことがあからさまに行われてくる可能性があって。中教審の答申が出された時には、わざわざ「地方大学支援室」というのを作って、地方大学が地域と連携して、色んな活動をさらに高めれば応援すると。そのために作ったって言ったんですけども、何か言い訳で作ってるようにもですね、実際の動きを見るとですね。ですから、そういう動きをこう見据えながら、そもそも地方に対する交付税をずっと減らすとかですね、そもそもの問題はまた別にあるんですけど、そういうことだということを認識しながら対抗していく必要があるんだと思うんですね。アルバイトなんかも結構学生がやってますから、それも無くなるということを考えながら。

【熊谷市長】

はい、これ強い関心を持って研究してまいります。

はい、それでは、武輪会頭、お願いします。

【武輪会頭】

昨年度の会議の時に少し申し上げたと思うんですけども、弘前大学さんから八戸商工会議所に対して、昨年、連携協定を締結したので、締結をしたということだけではなく、何かそれで仕事をしたいということがあって、八戸の企業の困りごとを聞いて、それを実現できるような工夫ができないかというようなことがございました。弘前大学さんだけじゃなくて、この八戸産学官連携協定というのはあるわけですから、他のここにいらっしゃる各大学の方にも連絡をしまして、ああ、そういうことであれば一緒にやってもいいんじゃないかということで、会議所の会員には会議所の広報誌で周知しています。「そのお困りごと、大学・高専との連携で解決しませんか？」ということで、各会員に配っています。これで大学と企業との連携ができればいいなとは思っているんですけども、門戸はもう以前から開かれていて、ただちょっと敷居が高いなというのを、この呼びかけだけで敷居がそう低くなるとは思ってないんですけども、いくつかでも成功事例を作っていって、より企業と高等教育機関との連携ができるように動いていきたいなという風に思っています。簡単なことから、アカデミックでないというようなこともあると出しにくいということがあると思うんですが、思い切って困ってること全部出してみて、というような働きかけをして、その中から可能なものをチョイスしていただければというふうに思っています。

また外国人労働者の話が出ました。八戸商工会議所といたしましても、3～4年前からその外国人労働力の活用ということを取り上げてきておりましたけれども、一昨日、商工会議所の東北の大会がありまして、そこで日本商工会議所からのコメントですけども、日本商工会議所も今後正面から取り組むというようなことを言われていました。これから、その外国人労働力の獲得の地域間競争になると思いますので、先ほど皆様からそれぞれ色々とそれに対する対策のお話が出ておりましたので、それがこの地域で進められればいいなと。県内では八戸は進んでいる方ですけども、全国的に見ればまだまだ遅れているのかなと。基本的には労働力が定着しないのは、人件費ということになるわけですが、人件費はその採用している企業の、元々いる国内の従業員との関係もありますから、それだけを上げるというわけにはやはりいかないわけで、外国人が定着しやすい地域づくりということが、一つの大きな魅力になってくるのかなというふうに思っております。以上です。

【熊谷市長】

はい、ありがとうございます。

それでは最後に、私の方から冒頭申し上げました防災・減災についてなんですが、昨年の12月、そして今年の4月、6月と、短期間の間に地震が続いております。12月、4月の地震を踏まえまして、今、庁内横断的にプロジェクトチームを作って、今検証をして、今後の対応について今月中に一応取りまとめをして公表することにいたしております。それから国の「防災庁」設置に向けた動きがある中で、広域連携によりまして、防災局を何とか八戸に設置していただけないかなということをして国に要望活動をしておりますし、来週も行くところです。防災局と、それから人材育成機関であります「防災大学校」の設置も要望しているところです。こういった中で、先ほど土屋先生の方からは地域の連合町内会長との連携による避難拠点、それから八戸市の防災協定、八戸学院大学の防災

士養成講座のお話もございました。八戸工業大学でも防災・減災のための研究や人材育成など、防災分野においてこれまで取り組まれていると思いますので、何か防災・減災分野で今後も連携しあえればいいなということを私の方から提案させていただきます。よろしくお願いします。

皆様方から御意見をいただきましたが、一応 11 時半ぐらいを目処に考えておりますので、他に御自由に、これまでの各先生方の御意見を聞いて何か御発言があればお願いします。

【土屋校長】

先ほど武輪会頭の方からお話があって、その弘前大学との連携もあったんですけど、地域企業との共同研究とかがなかなか進まないんですよ。先週も我々高専が持つて産業技術振興会でも、こういう共同研究テーマがあるんだけど、なかなか企業さん声かけていただけないんだよねっていうようなお話もさせていただいたんですけども。今日、私この資料を見てですね、資料 1 の 5 ページのところに、産学官連携による共同研究件数というのがあって、八戸工大さんって結構地域との連携盛んなのかなと思ってたんですけど、あんまり上がっていない。やっぱり何かこう敷居が高くて地域企業とうまくできてないっていう問題点抱えているんですかね。我々のところもなかなか進まないんですよ。これ、見かけ上あるんですけど、これほとんどが関東圏の企業なんですよ。どういうあれなんですかね。

【船崎学長】

まあ、私ももう少し地域企業を回る必要があるのかなというふうには思っているんですが、遠慮されてるところもあるのかもしれないし、我々のその足の使い方がまだ足りないのかなという感じはします。私、盛岡にいた時に、当時のトヨタ東日本という会社と、何とか共同研究を結べないかということで足を運んで、トヨタから課題を出してください、何でもいいですっていう風に出したら、本当に何でもいいものまで出てきました。例えば、匂いがなんとかならないとか、技術的なものともちょっと関係しない部分があったり、それから技術的なものもあったり。ですから遠慮せず全部出していただいて、それでまあ本当にできることを一つ一つ丁寧にやっていくというようなことで、関係性をもう少し作れたっていうことがありました。大きな企業でもこんなに大学の先生とか、高専の先生が望むような共同研究は生まれずに、こんなことまでやるんですかっていう風に先生方から言われそうな案件がたくさん出てくるんですが、そういうものから拾っていかないと、正直この件数というのは増えていかないのかなということで、改めて高専なり大学側の目線をもう少し下げた形でこう取り組まないといけないのかなと。ただ、大学も学生の指導等に余裕がなくなっているところもありますので、そこら辺までまだ稼げないっていうところも正直あるのかなとは思っております。高橋先生どうですか？

【高橋部会員】

八戸工業大学の高橋です。今、私は入試部長という立場でいますけど、様々なやっぱり企業が、この地域の企業が抱えてる様々な問題っていうのがあるんですけども、アカデミックなレベル、研究レベルまでっていうのはなかなかない。でも抱えている問題はもう誰にも相談できなくてモヤモヤしていると。そういったところに、私みたいな人間が行って、技術的な問題を解決してあげて、

そこからさらにその企業と一緒に、次のステップまで企業を教育していくっていう作業を以前はやっていました。今、技術的な問題はまず一步クリアしましたよね、じゃあ次の課題に行く時に、ちょっと研究開発だったりする際に、じゃあこういった補助金ありますよ、それを我々の方で書いてあげますから出しましょうとか、そういったところからと、さらに、本来企業であれば研究開発費っていうのを予算の中に置いておくの良いんです。確か税金上も良いはずなんです。そういったのを置くっていう頭の中にない企業さんも結構多くて。その辺の指導からやっていたんですけど、なかなか大学教員もそうやって動ける人間が少ないっていう現状もあります。ただ、やっぱりこっちからこう出向かなきゃないですね。待ってばかりじゃ、この辺の地方の企業の発展というのはなかなか、こっちから出向いて、「何かないですか？」っていう感じで入っていかないと、地域の中小企業の発展っていうのはなかなか。そこから支援していかないとダメだと思っています。

【土屋校長】

やっぱりそういう努力を積み重ねるしかないのかなと思います。なかなか地元企業と我々との間、接点がなかなかできないっていうのが、武輪さんがおっしゃったように間口は広げてますって我々サイドからそう言ってるんですけど、なかなか入ってこないし、行かないっていう、なかなか難しいですね。やっぱり行かないとダメですね。

【高橋部会員】

もう一つ言うと、結局それが地方にある私立大学だとか高等教育機関の存在意義であって価値だって、実はそのところもこっち側からも示していかなければいけないと思っていますし。それで企業さん側から「やっぱり大学、地方に大学があるっていうことの意味っていうのはここだね」っていうふうに持っていかないと。こういった場でそれが議論し合っていければなと思います。

【船崎学長】

東北大学ですね、私の1年先輩で、八戸高校出身の堀切川先生という方がいらっしゃって。堀切モデルということで、まあ今、高橋先生がおっしゃったように、地域の会社を一軒一軒丁寧に回って、ご本人がアイディアマンということもあって、いろんな課題解決をやって、成功例を各地方で繰り返してきてると。なかなかああいうスーパーマンはいないんですが、ああいう形で回ることによって、大学に行きやすいとか、相談に行きやすくなるという、コーディネーター的なそういう役目も大学として果たしていかなければいけないのかなという風には思ってます。ちょっと我々の努力不足というところがあるのかなという風に痛感しましたので、少し私の方でも考えてみたいと思います。

【熊谷市長】

やり方はあるような気がしますね。

他にございませんでしょうか。よろしいですか。

今の話は市の方でもちょっと考えてみて、何かこう連携取っていければなと思います。

よろしいですか。はい。それでは、これで本日の会議を閉じさせていただきます。事務局から何か

ありますか。

【司会】(小笠原政策推進課長)

はい、では長時間にわたりご審議いただきましてありがとうございました。最後にですね、今後のスケジュールについてお知らせしたいと思います。次回の会議でございしますが、令和9年2月頃の開催を予定しております。開催が近づきましたら改めてご案内いたしますので、よろしくお願いいたします。事務局からは以上となります。

【熊谷市長】

はい。それではこれにて本日の会議を終了いたします。ご協力いただきましてありがとうございました。お疲れ様でした。

----- 閉 会 -----